

「国と力と栄えは、とこしえにあなたのものであります。アーメン」マタイ 6：13 後半（3 版）

堀田修一 22・8・28

I 主の祈りで、本日の祈りを祈るか、削るかについて。最古の写本では、この句は欠けている。信頼できる注解者の解説。「主は、主の祈りを教えた際、締めくくりの言葉を何も語らなかったのだろうか。全体として非常によく整った構造の祈りなのだから、13節の前半でプツンと終わってしまったとは思えない。13節後半に近い文章のようなもので締めくくられたと想定する方が自然である。…初代教会は主の祈りを公同の礼拝にふさわしく整えるために、かなり早い時期に13節後半の文章を付け加えた。従って、今日の教会がこの部分を加えて主の祈りをささげることが自然である。この祈りを終えるにあたり、神の国、神の力、神の栄光を神に帰すのはまことにふさわしいことだからである。この最後の祈りの言葉こそ、イエスが御国の民に教えようとされた究極の目標であったと言っても過言ではない」（中澤啓介）。この頌栄は、主の祈りに、聖書全体の教えに見事に合致している。私たちが、主の祈りを祈り終えると、どうしても神を賛美して終わりたい。主の祈りを祈る心にこれほど見事に一致する頌栄はない。この最後の頌栄が初代教会から今日まで取り除かれず、教会や個人で祈られ続けているのは、この頌栄の内容が非常に聖書的であり他の箇所と一致しているからである。

II 「国と力と栄えは、とこしえにあなた（神）のものであります。アーメン」：13の素晴らしい意味を掘り下げたい。この頌栄は、ダビデが神殿建築に当たり、イスラエルの全会衆の前で神を賛美し、祈った言葉とよく似ている。「主よ、偉大さ、力、輝き、栄光、威厳は、あなたのものであります。天にあるものも地にあるものもすべて。主よ、王国もあなたのものであります。あなたは、すべてのものの上に、かしらとしてあがめられるべき方です。富と誉れは御前から出ます。あなたはすべてのものを支配しておられます。あなたの御手には勢いと力があり、あなたの御手によって、すべてのものが偉大にされ、力づけられるのです」I 歴代誌 29：10-12。ダビデは、「偉大さ、力、輝き、栄光、威厳は、あなたのものであります」と言い、さらに「王国もあなたのものであります」と賛美している。なぜなら、すべてのものは神から出たものであり、すべてのものは神によって支配されているからである。天と地の万物も世界の歴史も私たちの人生も。主の祈りの最後の「国と力と栄えは、とこしえにあなたのものであります」という祈りも、結局はすべてが神のものであると告白して、神をあがめているのである。

主の祈りは、すでに見てきたように、

①「御名が聖なるものとされますように＝御名が偽の神々から聖別され、唯一まことの神としてあがめられますように」という御名の栄光を願う祈りから始まる。神の御名の栄光こそが祈りの出発点。

※証し：主の祈りを講解説教させていただくことにより、私自身が、ますます、個人的にも、教会の共同体としても御名をあがめ、礼拝できることが、大きな喜びとなっている。感謝！次に

②「御国（i 私たちの心に主、福音を信じることにより神の国＝神の支配が心の中に来ますように。ii この地上の世界に福音が広まり、神の国、神の支配が拡大しますように。iii 世の終わりの神の時に主が再臨され新天新地という神の国が完成しますように）が来ますように」と願い祈る。

③「みこころが天で行われるように、地でも行われますように」と祈る。みこころが天では、常に行われているが、この地では、私たちの心の罪と悪魔の誘惑とこの世の悪の力により、神のみこころではない戦争や争いや色々な悪、政治家が悪い組織を利用する悪、悪い組織が人々を洗脳する悪が行われている。しかし、私たちは、あきらめず、悪より強い聖なる神に祈り、福音、みことばと御聖霊により悔い改めと救いが世界に広まり、神の国の拡大というみこころがなされるように祈る。こうして、私たちの中心の関心は神の栄光（神のみこころにより、人々が悪を悔い改め主を信じ救われ神を崇めること）であり、神の御国の拡大、完成であることを告白する。それは、新しく生まれたキリスト者の心からの願いである。主が教えられた主の祈りの後半は

①「私たちの日ごとの糧を、今日もお与えください」と祈る。地上に生きて神の栄光を現すために、自分たちの食物を求めて一切の必要のために祈ることを教えられる。それは、私たちの全存在が神に依存している事の告白。私たちに必要なすべてが神から来ることを知る故の祈り。

②「私たちの負い目をお赦してください。私たちも、私たちに負い目のある人たちを赦します」。この世では、キリスト者は完全になれないので、自分の罪を告白し罪の赦しを求め続け、神の赦しを受け、他の人も赦す祈り。

③「私たちを試みにあわせないで、悪からお救いください」。耐えられない試練にはあわせないで、悪からお守り救い出してくださいとの祈り。こうして私たちは、自分たちの全領域の生活が神と離れてはありえず、すべては神の恵み、憐れみであることを認める主の祈り。それ故に、最後に「国と力と栄えは、とこしえにあなたのものだからです」と神を讃えずにはいられないのである。この頌栄を深く学びたい。

1. 「国と」。私たちは主の祈りの中で、「御国が来ますように」と祈る。しかし、この最後の頌栄では、御国は、すでに神のものであると告白し、神が御国の王であることを承認している頌栄。そして、主イエスは父なる神の右に座しておられる。私たちは、そのような神の王としての在り方を再確認する。

2. 「力と」。私たちはすべての力の保持者である神を賛美する。神は、王であるだけでなく、全能の力をお持ちの神である。その御力のより、神は最善の時に、私たちの祈りにこたえてくださるのである。

「神の大能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力が、どれほど偉大なものであるかを、知ることができますように」エペソ1：19。

3. 最後に「栄えは」神のもので。すでに主の祈りの最初に神の御名が聖なるものとされ崇められることを祈り願ったが、最後の頌栄で、すべての栄光が神のものであることを告白する。「力ある者の子らよ。主に帰せよ。栄光と力を主に帰せよ。御名の栄光を主に帰せよ。聖なる装いをして主にひれ伏せ」詩篇29：1, 2。「私たちにではなく 主よ 私たちにではなく ただあなたの御名に 栄光を帰してください。あなたの恵みとまことのゆえに」詩篇115：1。「定められた日に、ヘロデは王服をまわって王座に着き、彼らに向かって演説をした。集まった会衆は、『神の声だ。人間の声ではない』と叫び続けた。すると、即座に主の使いがヘロデを打った。ヘロデが神に栄光を帰さなかったからである。彼は虫に食われて、息絶えた」使徒12：21-23。私たちが、神に愛され、神に造られ、命を与えられ、神に救われたのは、私たちも神を愛し、神の恵みに感謝し、神を礼拝し、何をするにも神の栄光を現すためである。「あなたがたは、食べるにも飲むにも、何をするにも、すべて神の栄光を現すためにしなさい」Iコリント10：31。神に愛され、驚くべき救いの恵み（すべての罪の赦し、永遠のいのち＝この地上で神に愛され神を知り続け神と親しく交わる命、地上の使命を終え神の時に死を迎えても、天国に行くことができ、天国で永遠に神に愛され、神と親しく交わる事ができる命）を心から感謝し、神を崇め礼拝し神の栄光を現すために生きることができるのは最高の幸せである。最後のアーメン＝祈り、賛美への同意の意。

主の祈りは、神の栄光に始まり、神の栄光に終わる。そこに真の祈りがある。祈りとは、神の栄光を求め、みこころを求めるもの。もし私たちが、神の御名が崇められることを最終目的として祈るなら、私たちの日ごとの祈りは、それがどんなに素朴なものであっても、神の確かな約束の中にあり、それ故に、その祈りが、神の時に答えられると信じることができるのである。今回、主の祈りの豊かな内容を数週間に渡り味わいました。これにより、さらに多くの方々が、この素晴らしい主の祈りを、その意味するところに従い、熱心に祈り続けられますように。「すべてのものが神から発し(創造)、神によって成り(支配)、神に至る(帰結)のです。この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン」ローマ11：36